

詩文選

詩文選

清原深養父郎編輯

下

特40  
979





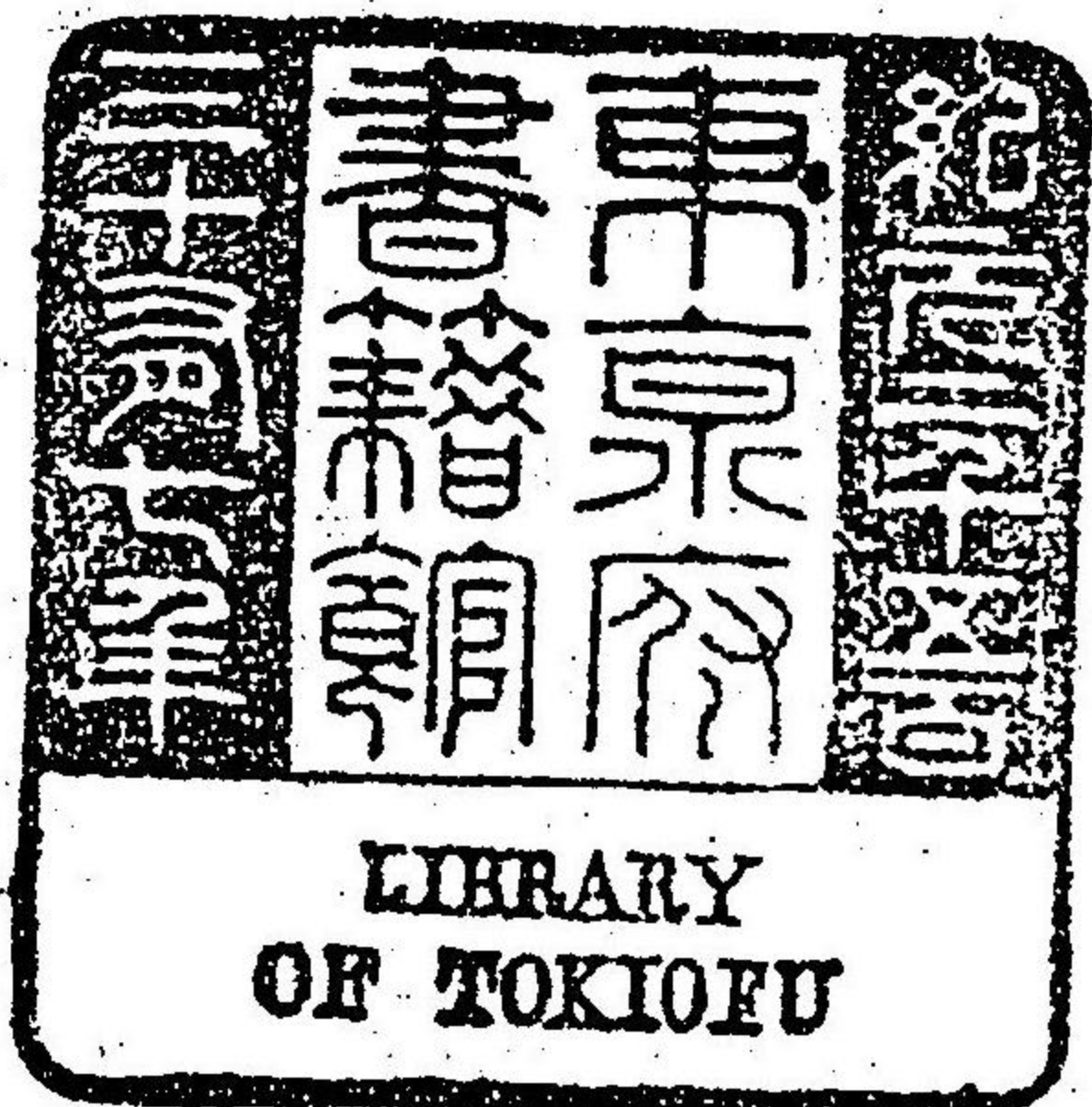
東京府立  
書籍館  
蔵書

選卷之下

渡邊助次郎 編輯

藤舜海先生之畧傳

就テ洋医ノ術ヲ學ブ医術長スルニ及テ養子トナル  
萬延二年肥前長崎ニ遊ビ洋醫朋百氏ニ隨ツテ  
内外諸科ヲ修ム而シテ外科術ニ於テハ朋百氏  
モ亦自カラ以テ及ハストス居ルコト一年ニシ  
テ藩ニ歸リ其業益々進ム幕府屢々召セドモ起  
タズ本邦醫學ノ未ダ開ケザルコトヲ歎ジテ之





ヲ闡明スルヲ以テ自ラ任ス乃チ私立病院ヲ建  
 テ生徒ヲ延ビテ之ヲ教育ス方今有名ノ士岩佐  
 相良佐々木等ノ諸人皆其門ニ出ツ而シテ病客  
 ノ来リテ診察ヲ乞フ者常ニ門前ニ填咽ス先生  
 又嘗テ佐倉藩ニ建議シテ病院ヲ設立セシム此  
 本邦病院ノ嚆矢ナリ明治二年徵命アリ文部大  
 丞兼大典醫ニ任シテ大學東校ノ學務ヲ管セシム  
 君之ヲ擔當シテ施設スル所多シ醫學一變シテ  
 今日ノ隆盛ニ至リシモノ全ク先生ノ力ニ賴ル  
 ト云フモ亦溢美ニ非ルナリ明治二年先生建議

スル所アリテ府下病院ヲ設ケラル又衛生ノ事  
 ニ於テモ屢々獻言スル所アリ同一年先生職ヲ  
 辭シテ順天堂病院ヲ建築ス病室數十其宏大清  
 麗ナル官立ノ病院ニ遜ラズ先生男アリ進ト稱  
 ス西洋ニ留学シ大ニ其業ニ長ヤリ父子協心同  
 力盛シニ治療ノ術ヲ施コレ普ク世人ヲ救ワシ  
 ト欲ス世ノ沈痾ヲ抱キ危患ニ罹ル者爭テ其病  
 ヲ救ジ眇視跛履シテ歸ル者月ニ數百人ニ及ブ  
 實ニ今世ノ乃圭社會ニ向テ能ク濟世ノ術ヲ施  
 コシ人ヲシテ壽域ヲ躋シムルノ國手ヲ索メシ

諸公詩文選考之下



ト欲セバ先生ヲ令テ、ソレ誰ソヤ  
福澤諭吉先生ノ畧傳

先生ハ豊前國中津ニ生ル大分縣ノ人ナリ世中  
津藩ニ仕フ幼ケナクシテ漢籍ヲ學ビ漸ク長ズ  
ルヤ浪華ニ赴キ緒方洪齋ノ門ニ入り始メテ蘭  
書ヲ習讀ス安政五年東京ニ來リ英蘭對譯ノ書  
ヲ購求シ辭書ニ就テ頗ル螢雪ノ苦辛ヲ試ミタ  
リ萬延元年幕府ノ軍艦奉行某ノ隨從トナリテ  
米國ニ航シ在留スル事數閱月其間英語ヲ學ビ  
タリ幾クモ無ク帰朝スルニ及ヒウエブストル

ノ大字書其他數冊ノ書ヲ携ヒ來レリ是ヲ日本  
ニウエブストル大字書ヲ舶載シ來レル始メト  
ス文久二年復タ幕府ノ使節ニ隨テ歐洲諸國ヲ  
巡回シ此時亦英書蘭籍ヲ買得タリ其帰朝セシ  
後チニ漸ク書ヲ挾ムニ乏キノ歎ヲ免カレ且學  
業モ大ニ進歩シテ得ル所有ルヲ覺イタリ慶應  
二年ニハ英蘭ノ諸書ヨリ抄譯シカタハラ航西  
中間見スル所ヲ記シテ一編ノ書ヲ著シ西洋事  
情ト名ケタリ此ヲ本邦ニテ英書ヲ譯述セシ者  
ノ嚆矢トス同三年ノ春再ビ米國ニ赴キ多ク英



書ヲ購求シ、歸朝ノ後、開成所ノ教官ト成ル幾クモ無ク、戊辰ノ變革アルニ際シ、開成所モ亦閉ツ是ヨリ先キ先生私塾ヲ東京芝ニ創メ名ケテ慶應義塾ト云フ、四方ヨリ笈ヲ負ヒ來テ入学スル所ノ生徒無慮數百人、其盛ナル蓋シ私塾中ノ王ト謂ツヘシ、維新ノ後チ諸藩弊ヲ一洗セントスル各争テ先生ノ著述セル西洋事情ヲ購求ス、以テ其書ノ世ニ影響セシ所少ナカラザルヲ證スベシ、去レバ先生ノ著述ニ於ケル敢ニ一毫モ世ニ阿ルノ筆氣無ク、侃々時弊ヲ辨ズ、又讀ミ難ク

解シ易スカラザルノ文ヲ作ラズ能ク述ク、喩ヲ取テ行文快活ナリ之ヲ以テ自ラ一種卓偉ノ風アリ、世呼ンテ三田流ノ文章、先生芝三田ニ住スルヲ以テナリト云フニ至ル、或ハ其文ノ鄙俚ニ涉ル事ヲ尤ムル者アリト云ヘトモ是固ヨリ先生力辭達シテヤムノ識見ヲ看破スルノ眼ナキ者ナリ、明治七年學問ノス、メト題セル小誌ヲ著シタリ、中ニ謂ルコトアリ曰ク、忠臣義士ノ計死モ權助ガ主人ノ金ヲ失ツテ首ヲ懸ルモ其死ヲ以テ文明ヲ益スル事ナキニ於テハ同一ナリ



ト是ニ於テ世ノ論者ハ之ヲ駁撃シ一時楠公推  
助ノ論ヲ以テ殆ント新聞紙上ヲ填ムルニ至レ  
リ亦以テ先生ノ片言隻辭モ世人ノ心ヲ留ムル  
所トナルヲ見ルニ足レリ先生又演説ノ要用ナ  
ルヲ首唱シ明治八年其塾測ニ宏壯ナル演説場  
ヲ建築シ自ラ率先シテ論壇ニ上ル雄辯卓論河  
ヲ懸ルガ如シ聽ク者自痴聾者ニ非ルヨリハ拍  
手シテ快ト稱セザレハ無シ我邦ノ學士社會ニ  
於テ演説有ル亦之ヲ以テ嚆矢トス是ニ先キ夕  
ツコト二年森有禮氏ノ米國ヨリ帰ルヤ學士ノ

集會ヲ起サントス先生及ヒ箕作麟祥、西村茂樹、  
加藤弘之、西周等ノ諸氏其社員タリ即チ明六社  
是ナリ社中先生ヲ推テ社長ト為ントス先生之  
ヲ辭ス森氏其任ニ當リ兩來毎月二回社員ヲ會  
同シ百般ノ事理ヲ談論ス彼板垣後藤等ノ諸氏  
ガ民選議院ヲ創立セラレン事ヲ建言スルニ及  
ビ世ノ論者ハ爭テ新聞紙上ニ於テ其得失ヲ辨  
爭ス就中加藤氏ハ尚早シト断言ヤリ此ニ於テ  
民選議院設立早遲ノ論ヲ以テ亦一時各社ノ新  
紙ヲ填ミシ事アリ一日先生某氏ト前ノ問題ニ



就テ論シテ曰ク子ガ民選議院ヲ設クル尚早シ  
トノ説ヲ主張スルハ果シテ何ノ見アルヤ例へ  
バ廢藩置縣ノ制モ之ヲ行フニハ最上ノ好時節  
ナリトシテ之ヲ施行セシヤ豈其然ラン當時尚  
早シト思ヒシ者モ多カリシナラン然ルモ今ニ  
シテ考フレハ尚遲カリシナラズヤ民選議院モ  
今日ノ景況ニテハ尚早シト想像スルモ一應然  
ルベシト雖ドモ後年ヨリ之ヲ見レバ或ハ其遲  
キヲ知ランガ故ニ其開設ノ早遲ハ今日我輩ノ  
喋マシテ決議スベキモノニハ非ズ人民ノ奮起

シテ之ヲ開設スルト否トニ関セリ然ルヲ徒ノ  
ニ狐疑猶豫シテ時節ヲ待ツニ云フガ如キハ到  
底無益ナラズヤト某氏答テ去レバ廢藩置縣モ  
當時ニ在テハ壯快ノ舉ナリト思ヒシガ今トナ  
ツテ熟考スレハ是トテモ尚早カリシナラン何  
トナレハ廢藩ハ人民ノ氣力付テ自然ニ壓抑ヲ  
厭ミ道理ヲ主張シ政府カ此舉ヲ施行スルヲ促  
カシテ為サシメタル者ナランニハ美スベシト  
雖ドモ全ク然ラズ唯僅ニ勤王黨ナル者ノ手ニ  
由テ為シタル事故人民ニ取テハ却テ一ノ不幸



ヲ與ヘラレタリト云フモ不可ナラン何トナレ  
バ滿天下ノ物スベテ壓力強クレハ則チ彈力亦  
隨テ強キ道理ニテ藩主ノ抑壓愈強キトキハ人  
民ノ反動力亦隨テ增長スヘキ理ナリ去レハ西  
洋各國ニ於テ政体ノ變革ハ人民ヨリ自由ノ論  
ヲ主張シテ之ヲ政府ニ促シタル者ナルニ我邦  
ハ之ニ反シテ唯何事モ政府ヨリ允准シ人民モ  
亦初メテ之ヲ拜受スルノ思ヒヲ為セリ斯ル鼻  
屈ナル人民ニハ民選議院尚早シト云ハザルヲ  
得ズ英ノ(マダナカルタ)ノ如キハ人民ガ其壓制

ヲ厭フノ反動力ニヨリテ成果セル事業ナリ故  
ニ國家モ亦強盛ヲ致セシニ非ルヲ得ンヤト先  
生マタ之ヲ駁シテ曰ク子カ所謂廢藩モ尚早シ  
ハ更ニ領解シ難キコトナリ從前ノ大名ナル者  
ガ今日マテ威權ヲ振シナラハ人民カ氣力ヲ増  
スベシトハ最モ信シ難シ何トナレハ三百年モ  
此ヲ實際ニ驗シテ獨立ノ氣象ニ乏キコト猶ホ  
依然タル事明カナリ然ルニ五年或ハ七年間壓  
制ヲ試ミタリトテ人民ガ一時ニ氣力ヲ生スル  
ノ理ナキハ昭々タラズヤ去レハ從前ノ大名ナ

諸公待大義集之下



ル者ヲ廢スルコト無クハ無用ノ國費ヲ増シ  
 日本國ノ經濟上ニ於テ不都合少ナカラサルベ  
 シ到底大名ハ人民ノ為ニハ貪乏神ト云フベキ  
 者ナリ然ルヲ明治四年ニ廢セシハ大ナル幸ナ  
 リ亦勤王黨ニモセヨ矢張日本人民ノ所為ニ非  
 ズシテ何ソヤ英ノ(マグナカルタ)ノ一件ハ政府  
 ハ強暴ニシテ人民モ慄悍ナリ強ト強トノ抵抗  
 ト謂フベシ我邦ニテハ政府ハ柔和ニシテ人民  
 ハ虛弱ナリ柔ト弱トノ鈞合ハ恰モ善ク相適ヘ  
 リ今我邦ノ人民ニ向フ俄ニ英人民カ昔時ノ氣

カラ持タシメントスルハ無理ナラズヤ其氣力  
 ヲ得セシメント欲セハ區會ニシテモ縣會ニテ  
 モ片端ヨリ始ムルニ如カズト言ハレシ事アリ  
 トゾ近世先生ノ大事業タル世人ノ能ク知ル所  
 ナリ嗚呼先生ヲ惜テ開化進歩ノ人トスフ者誰  
 ソヤ我未タ曾テ知ラサルナリ

西郷隆盛之傳

隆盛ハ薩州ノ人ナリ舊名吉之助ト稱シ又南洲  
 ト号ス其人トナル性質豪毅英邁人ニ對シテ默  
 然タリ然レモ眼睞ヤトノ人ヲシテ射ルカ如シ



衆皆氏ニ遇フ毎ニ肅然トシテ貌ヲアラタム常  
 ニ勤王ノ志アリ嘉永ノ頃ヨリ上京シ國家へ忠  
 ヲ尽サント欲シ苦心シテ諸所ニ周旋ス時ニ京  
 都ニ月照トイフ僧アリ其人タル素ヨリ勤王ノ  
 志アリ尤モ才氣充滿セリ會隆盛月照ニ面語ス  
 論說同意ナレハ於是テ志ヲ合セ死ヲ共ニセシ  
 ト誓ヒ屢々幕政ヲ撃タント企ルニ事發露シ幕  
 府ノ勢威甚シケレハ遂クルト能ハス於是隆盛  
 ハ亦故郷へ帰り藝隱スレバ其探索ノ嚴ナルニ  
 怖レ身ヲ容ル、所ヲ失セシトゾ然而シテ再ヒ

月照ニ遇ヒ於是テ兩氏ノ志遂クルト能ハサルニ  
 及ヒ共死スルヲ決シ乘船シテ櫻島ニ漂泊シツ  
 、兩氏水中ニ身ヲ投ヤシニ哀レナルカナ月照  
 ハ溺死ス一人隆盛ノミ蘊生ス於是テ菊地源吾  
 ト改稱シ再ヒ薩州ニ歸リシニ島津公聽ズシテ  
 流罪ニ科ス此時ニ亦大島三右エ門ト改稱シ文  
 久年中ニ至テ赦免ヤラル、ヤ直チニ撰舉サレ  
 テ藩ノ政事ニ參與シ威勢日ニ高シ戊辰ノ役ニ  
 際シ參謀ノ任ニ當ラル諸処ノ幕士ヲ襲敗シ漸  
 ヲ單功ヲ奏シ遂ニ朝廷參議ニ任ヤシニ後辭シ



テ國ニ歸リ二千石ノ賞典祿ヲ賜ハリシニソノ  
ノチ亦朝廷拜シテ參議ニ任ゼラレ再ビ陸軍大  
將ヲ兼勤ス明治四年征韓ノ論ヲ主張スレ氏合  
ハスシテ又古郷へ歸リ私學校ヲ設ケ氏ハ日々  
田畑ヲ耕シ山狩ナドヲシテ樂トス衆民ノ貧困  
病者ヲ救助スルヲ實ニ厚シ其品行タル身ハ質  
素節儉辛苦ヲ為セシトヲ他國ノ人ト雖氏ノ  
有名ナルヲ知サルモノハアラサルナリ然ルニ  
明治十年二月賊徒ノ將トナリテ  
朝廷ニ敵シ御國ヲ動搖セシニ同年九月廿三日

城山ニ於テ戰死セシトソ嗚呼勲功ノ大ナルト  
亦品行ノ正ナルトハ全國譽ソフテ不知者ナシ  
トイフ

同氏ノ自作

舊作

不養虎兮不養豺亦是九洲西一涯七百年來奮知  
處百二都城皆我儕壓倒海南三尺劍蹂躪天下七  
寸鞋人若欲識余居處長住魔城千石街

失題

我有千絲髮幾幾黑於漆我有一寸心皓々自於雪



我愛猶可斷我心不可截

全

建業唯期和蘭東、鬪爭獨希名、勦翁、半宵提劍望寒  
月、今古興亡兩眼中、

楠公

明籌奇策不可摸、正勤王事是真儒、懷君一死七生  
語、抱此忠魂今有無、

失題

天步艱難繫獄身、誠心豈莫耻忠臣、遙追事跡高山  
子、自養精神人不吝、

亡友月照十七回忌辰

相約投淵魚、後先豈圖波上再生緣、回頭十有餘年  
夢、空隔幽明哭墓前、

送兵士之東京

王家衰弱使人驚、憂憤隕身千百兵、忠義凝成腸鉄  
石、為楹為礎築堅城、

辭職

獨不適事情、豈聞歡笑声、雪羞論戰畧、忘義唱和平  
秦檜多遺類、武侯難再生、邪今何定後世必知清  
同氏自作、文



辨良奸

國家之安危存亡、莫不由用人之得失也、苟得良臣、則國富民優也、用佞人則災害並起、國之大○弱甚、則危亡立至矣、蓋人君誰有好姦姦佞而惡忠良之心哉、自古以來、退忠良、愛佞人者、不可枚舉、是無他、其實以奸人為忠良、委之以政、而不疑、豈計其以忠目之者、大不忠而其為不忠、而棄之者、真忠良哉、其所以目笑如是、相反也、抑有故、夫佞所之事君也、欲違已慾、而於國之安危、邈然不顧、是故希旨迎合、不選善惡、徒以悅君心為主、日進謏言、以長君之欲、諛忠

臣虐下民、而肆其私曲、然而君不能察其奸、謂彼能尊我敬、我又能從我言、於我所欲、無所不供、增加貢稅、以補國用之不足、令我安者、皆彼之力也、非至忠而何、於是貴其位、重其祿、寵之愛之、遂以國權委之、至于危亡、曾不知為其大奸、可不哀哉、夫良臣者、性剛直、質實為國忘身、君有小過、則必諫之、正之、有大過、則棄其身而強諫、無所不盡矣、雖望君欲導之以仁義、萬人毀之、漠如萬人譽之、泊如、進退必以禮、欲布恩沢於民、以置國家於泰山之安者、良臣之心也、苟不能察其心、則謂被輕蔑、我又不從我所欲、假忠



諫之名、而屈辱我、失臣下之禮、而發悔慢不遜之言、不忠孰大焉、加之讒言毀語、雜然滿耳、終廢棄之、而不疑、甚則至加刑戮、可不歎哉、故國之安危存亡、莫不由君之明不明也、是以君子先窒其欲、以勸道義、正其心、以接群臣、明以察曲直、邪正黜諛者、遠讒人、而舉強直、諫諍之臣、日以聞過、為先務、委之國之大、事衆良、皆為股肱、施仁政、固邦本、日富月饒也、故用佞奸、則國危、舉忠良、則國安、嗚呼、用人之得失、其關係國家、不亦大乎、

知賢

### 桐野利秋傳

桐野利秋ハ舊名半次郎トイヒ姓ヲ中村ト稱セリ薩州ノ人ナリ鹿兒島城ノ上吉野村實方ト云フ処ニ住セリ先祖何某曾テ舊主ノ密命ヲ受ケ家老平田太郎兵衛ヲ殺害シテ竊ニ肥後ニ遁レ居シガ数年ヲ經テ鹿兒島ニ召還サレ姓ヲ中村ト改メタリト云フ利秋ハ維新ノ前ニ舊藩ノ兵士ニテ京師ニ在番シ勤王ノ志厚ク頗リニ攘夷ノ説ヲ主張シ同藩ノ士永山矢一伊集院金二郎肝付十郎等ト志ヲ同ウシ其コロ水戸ノ武田耕



雲齋が幕府ニ敵抗シテ筑波ニ篋リ終ニ圍ニテ  
突キテ上京ヤント敦賀マテ来リシ時モ利秋ハ  
單身ニテ敦賀ニ赴キ危険ヲ冒シテ事情ヲ探偵  
シ無事ニ京都ニ歸リタリ其後長州征伐ノ時ハ  
大ニ異議ヲ起シ其伐ツベカラザルノ理ヲ切論  
シ又西郷隆盛トハ免角意見合ス始終獨立シテ  
事ヲ為セリ斯クテ去ル慶應丁卯ノ年ニ徳川慶  
喜奏問ノ事アリト御所ニ迫リ一晝夜ヲ經テ二  
條城へ退クト其マ、桐野ハ直ニ宮門ヲ守衛シ  
會津兵ヲ追拂ヒタルハ實ニ神速ナル手際ト人

皆感服シタリ夫ヨリ翌年正月ニ至リ慶喜上洛  
ノ先供トシテ會桑ノ二藩兵器ヲ携ヘテ馳マ上  
リ終ニ伏見ニテ戦端ヲ開キシ時モ桐野ハ永山  
ト共ニ御幸宮ノ戦ヒニハ真先ニ進ミテ敵中へ  
切テ入り大ニ戦功アリ夫ヨリ東征先鋒トナリ  
テ江戸ニ入り芝増上寺ノ学蓮舎ヲ陳營トセシ  
ガ西郷隆盛等ト共ニ江戸城ヲ受取リシ後ハ神  
田橋内ナル酒井ノ上屋敷へ移リタリ居ルコト  
幾クモナク奥州ニ出陣シ官軍會津ニ向フ時ニ  
ハ加治木ノ兵ヲ率ヒ艱苦シテ間道ヲ廻リ白川



口ノ官兵ト合シ會津ヲ陷ルマデ度々戦功アリ  
 テ軍監ニ命セラル平定ノ後ニ賞典祿百餘石ヲ  
 賜リ藩ニ歸テ始メテ中村ヲ攻メテ舊姓ニ復シ  
 桐野利秋ト名乗り尋テ大隊長トナリテ東京ニ  
 上リ市ヶ谷ノ陣營ニ在リシカ幾クモナク陸  
 軍少將ニ轉任シ熊本鎮臺司令長官ト成リ熊本  
 ニ駐在スルコト一年アマリニシテ陸軍裁判長  
 ニ轉シ下谷不忍池ノホトリナル舊榊原ノ邸ヲ  
 購ヒテコノトコロニ住ヒツ子ニ閑静ヲタノシ  
 ミ花美ナル道具ナドヲヨロコビ昔シニカハリ

テ優ナルフルマヒナリト人々モ云々合ルクラ  
 ヒナリキ征韓ノ論ヲコリシヨリコレマデ合ハ  
 ザル西郷ナレトソノ意見ノ同シキヨリ終ニ無  
 ニノ黨ト成リシガ西郷ガ國ニ引去ル時ニ桐野  
 別府ヲ連レユキシハ二人トモ剛情モノナレハ  
 アトニテ如何ナル変ヲヲコサンモ知ルヘカラ  
 ズトノ深意ヨリ出タルナラント云ヘリソレヨ  
 リ國ニカヘリテノチハ弥々西郷トフカク交リ  
 終ニ今日ソノ謀叛ニ與スルニ至リタリソノ人  
 トナリ豪邁ニシテ武ヲ好ミ學術ヲ脩メス常ニ



剛強ノ士ト交ルノミナリシガ京都ニアリシ時  
ハ同藩ノ士田中幸助ノ鹿見島ヲ脱シテ京都ニ  
在ルニ會シ始メテ文事ヲ談スルヲ知り頗ブル  
天下ノ形勢ヲモ知ルコトヲ得タリシカバフカ  
ク是ニ心服シ常ニ壯士ヲアツメテ武ヲ談ズル  
ニ他人ノ抗弁スルハ曾テ用ヒサリシホドナリ  
シモ田中ト膝ヲ交ヘテ其古今ノ形勢各國ノ風  
俗人情ヲ談スルヲハ耳ヲカタムケテ是ヲ聞キ  
決ンテ其論ヲ可否セズ若他人ニシテ田中ヲ誹  
ルモノアレハ大ニ憤怒ストゾ嗚呼若シ田中ヲ

シテ在シメバ利秋何ゾ斯ル死ハ遂マジキトイ  
ヘリ

同氏ノ自作

時勢論

或諗予曰ク國家ハ形様ヲ以テ見ルヘカラズ政  
治ハ規術ヲ以テ總フヘカラス形様ヲ以テ國家  
ヲ見ル水偶物ニシテ可ナリ規術ヲ以テ政治ヲ  
見ル婦女子ニシテ可トリ金粉之ヲ塗リ綺羅之  
ヲ飾ル木偶却テ美ナリ規術惟レ恃ミ細利惟レ



男兒不出憂ルニ不足ナリ予今ノ政府ヲ見ルニ  
偶物ヨリ甚シキ者ヲ以テ國家ヲ守ルニ擬シ女  
子ヨリ拙キ者ヲ擧テ天下ヲ治ムルヲ許ス而シ  
テ金貨ノ多費男兒ノ不出亦汲々トシテ惟憂フ  
醜体實ニ見ル可カラズ而シテ怪ニ足ラザル也  
偶物ヲ用ヒ婦女ヲ擧ル者即偶物ニシテ且ツ婦  
女子ナレハナリ予聞ク上ノ好ム処下之レヨリ  
甚キ者アリト支那事件未タ平カナラサルニ當  
テ諸縣士族先鋒タラント願ヒシ者累々少ナカ  
ラス實ニ可笑ノ甚キ者ト云フベシ此等ノ人ハ

國家ヲ以テ如何ナル者トハル者ゾ今ノ政府ハ  
今ノ國家ノ大讎敵ニシテ今ノ蒼生ノ怨望スル  
所ナリ是故ニ今ノ政府ヲ助ケント欲スル者ハ  
今ノ國家ノ不忠ニシテ今ノ蒼生ヲ塗炭ニ苦マ  
シムルニ在祖スル者ト云フヘシ我是ヲ以テ知  
ル今ノ憂國慷慨スル者真ニ憂國慷慨スルニ非  
スシテ唯其私ヲ成サントスルニ在ルヲ形ヲ以  
テ之ヲ見ル憂憤切ナルが如ク情ヲ以テ之ヲ察  
スル悲哀ニ堪ヘラレザルカ如シ而ノ其實憂憤  
ニ切ナルニ非ルナリ悲哀ニ堪ヘラレザルニ非



ルナリ其私ヲ成ント欲スル者ノニ試ニ米國華  
 盛頭ヲ見ヨ英國ノ逆政ヲ施スニ當テ敢テ奔走  
 セス又周旋セス口ヲ開カス足ヲ擧ケズヒソカ  
 ニ時ノ至ルヲ待ソ而ソツノ起ルニ當テヤ向フ  
 所皆破レ戦フ所必ズ勝ツ而ソ其兵タル携フ所  
 皆農具工器ニ過キス之ヲ強英ノ熟兵ニ比スル  
 啻ニ霄壤ノミニ非サルナリ形ヲ以テ之ヲ見ル  
 萬々勝ツ可キノ理ナシ而ソ勝ツ所以ノモノ唯  
 時ニ乘スルヲ以テナリ時至ラサレバ則チ朽チ  
 テ已ム至レハ則チ手ニ唾シテ起ツ憂國者ノ為

ス所素ヨリ此ノ如シ復ク怪ムニ足ラサルナリ  
 天下麻ノ如ク亂レ怨嗟ノ声四海ニ滿ルニ及シ  
 テ而後ニ發ス發スルニ豫メ成敗ヲ論ヤス唯此  
 擧タルヤ實ニ義擧ナリ盡スモ此時ナリ死スル  
 モ此時ナリ成敗在天慮ルニ違アラサル也肺肝  
 先ツ定リ而ソ臣子ノ義務ヲ尽ス故ニ應スル者  
 如響来ル者如招而メ率是ヲ以テ成ル今ノ慷慨  
 スル者皆輕々薄々毛ノ如ク紙ノ如ク見ル所極  
 メテ小而メ且拙シ唯一時過激ノ論ヲ借リ斬姦  
 ヲ謀ルモ真ニ非ス恢復ヲ議スルモ真ニ非ス機



ニ會テ身ヲ惜ミ事ニ臨テ生ヲ貪ル其志幾多ノ  
 勲功ヲ立テ而テ何ノ官ニ就キ何ノ位ニ上リ衆  
 華以テ人ニ誇ント欲ス而メ人ニ逢フ毎ニ切齒  
 扼腕喋々大事ヲ吐露シ傍ラ人無キカ若シ故ニ  
 一事トシテ成ルナク却テ人ノ嫌疑ヲ来シ遂ニ  
 首領ヲ保ツ能ハサルヲ致ス實ニ憫笑ニ堪ヘサ  
 ルナリ逆政ノ下宜ク門ヲ閉チ氣ヲ養フヘシ何  
 ツ慷慨スルヲ為シ尺蠖ノ伸ント欲スル必ズ先  
 ツ其身ヲ屈ス鷲鳥ノ擊ント欲スル必ズ先ツ其  
 翼ヲ收ムト茲ニ入アリ曰ク我ハ何ノ某ナリ我

父曾テ某ニ殺サル父ノ讎共ニ天ヲ戴ク可ラス  
 我故ニ年来讎ヲ求ムルト雖氏未タ其所在ヲ知  
 ラズ悲憤堪フ可カラズ汝讎其譬ヘ九地ノ下ニ  
 載クル氏何ゾ能ク終生我ニ逢ハサルヲ得ンヤ  
 ト故カ高声呼テ市中ヲ横行スル者ニシテ我未  
 タ曾テ其志ヲ遂クルアルヲ聞カス彼ノ立志社  
 ノ如キ何等ノ狡猾ヲ何等ノ醜体ゾ虚声ヲ張テ  
 人心ヲ引ク引カル、者ノ愚凡素ヨリ論スルニ  
 足ラスト雖氏亦豈憫然ナラスヤ苟モ真ニ志ヲ  
 國家ニ致サント欲スル者田間山中ニ閑居シ我



固有ノ英氣ヲ養フヘシ時機ノ来ル其不遠何ソ  
 奔走狼狽政府ノ義務ヲ奪却スルヲ為シ天下ヲ  
 治ムルハ政府ノ義務臣子ノ吻ヲ容ルヘキ処ニ  
 非ス而ノ今ノ憤發慷慨スル者皆故力高声市中  
 ニ横行スル者ノ比ニノ其事業ヲ見ル亦政府ノ  
 義務ヲ奪竊スル者我是等ノ人ヲ見ル憫笑ニ堪  
 ヘズ又憤罵ニ堪ヘザル也且夫レ社ヲ結ンデ志  
 ヲ合セ共ニ國家非常ノ変ニ應セント欲スル者  
 亦可笑ナリ志ノ合フト不合トハ決シテ土地ノ  
 遠近ニ由ルニ非ス唯時機ノ来ルニ及テ我立テ

人立ツ此レ是ヲ志ノ合フト云人起テ我不起是  
 志ノ合ザル也縱令千里ノ隔ヲ作スモ志一ナレ  
 ハ見ル所必ス一見ル所一ナレハ起ツ所亦必ス  
 一族居所ノ遠隔素ヨリ憂フルニ足ラサル也我  
 胸中ノ見議已ニ定ル又敢テ世事ヲ探損セスシ  
 テ可ナリ時勢ヲ談セスシテ可ナリ相會スルノ  
 日ハ花鳥風月ヲ談シ勤テ人ノ束縛窘感スル能  
 ハザル所ニ致シ今古英雄ノ進退事業ヲ熟察シ  
 兵機ノ要領挙動ニ注目シ以テ機會ヲ待ツ可キ  
 ナリ萬民能ク安堵シ以テ怨嗟ノ声ヲ以テ鼓腹ノ



警ニ變セハ實ニ國家ノ幸福ニシテ我輩振起ノ時  
ナキナリ時機ナケレハ亦田間ニ朽チ果シノミ  
朽ルモ亦何ゾ恨ミン唯恐ラクハ時機ノ近キニ  
在シコヲ或難我曰以蒼生ノ苦状ヲ見テ而ノ振  
起セサル恐ラクハ丈夫ノ名ニ負シ我答曰然ラ  
ハ蒼生ノ塗炭ニ苦ムヲ目下ニ見テ而ノ恬然傍  
觀スル實ニ忍サル所情素ヨリ貴説ノ如シ雖然  
我國ノ制タル以義為大而ノ情次之名義ノ在ル  
所水火且不避名義ナクシテ起ツ事成ルト雖氏  
義ニ於テ愧ル所今天下ノ形勢ヲ見ル恐嗟ノ声

紛々タリト雖氏猶能ク之ヲ形ニ著ハサス甚キ  
ニ至テハ唯口ニ言ヒ面ニ嚙スルノミニ非ス是  
レ之ヲ機會ヲ待ツト云今夫レ政府ノ為ス所ヲ  
奪テ起ツ名不正而事不順是臣子ノ深ク恐ル可  
キ所ナリ可助ハ則チ助クルニ死ヲ以テシ其助  
ク可カラサルニ當テハ正ニ退テ一身ノ分義ヲ  
守リ敢テ世間ヲ顧ミス笑テ以テ時機ノ至ルヲ  
待ツ真ニ憂國ノ念至深至厚ノ者ニアラサルハ  
不能ナリ不平ノ為メニ名ヲ正義ニ假リ蓄財ノ  
為ニ身ヲ官途ニ寄ス者ノ如キハ元ヨリ論スル



ニ足ラサルナリ噫紀元二千五百三十五年

永山彌一之畧傳

永山弥一ハ薩州ノ人ナリ幼少ノキハ名ヲ萬齊ト稱セリ其藩ニシテ茶道職ヲ勤メ尤モ豪勇ノ聞ヘアリシトソ其頃茶道中ニ一人ノ豪傑アリ其レヲ何人ソト尋ヌルニ有名ナル奮鹿見島ノ縣令大山綱良ニシテ劍術ニ於ケル其國ニ一人ト呼ル、達人ナリ亦居合ノ如キハ檐ニ滴ル雨垂ヲ斬リ再度兩垂ノ下ラザル中ニ劍ヲ鞘ニ收ムル程ノ妙手ナリシト云フ去レハ當時ノ茶道

ハ皆大山ノ風ヲ學ビ其本職ハ打捨テ、專ラ武道ニ志シ追々蓄髮シテ還俗スルニ至レリ中ニモ永山ハ天姓美質ニシテ豪勇ヲ兼ネ併ヤテ能書ノ聞ヘアリ又茶事或ハ插花ノ如キハ茶道中ニ於テ實ニ屈指ノ人物ナリシトゾ長州ノ京師ニ暴發セシ頃ヨリ永山ハ桐野ト共ニ上京シ頗ル國事ニ尽力セシガ戊辰ノ戰爭トナルニ及デハ薩ノ四番隊ノ監軍トナリ數回ノ戰場ニ出陣セリ然ルニ永山ハ豪勇ナル進撃ノ節ハ每戦必ズ無刀ニテ大肌脱キトナリ隊ノ真先ニ進ミ出



テヤア、吾ユソハ斯ニ今討死セン續テ進メト  
驅ケ出シ敵ノ討死セシ者ノ帶ヤル刀ヲ點檢シ  
テ若吾ガ望ミニ應スル刀アレハ分捕シユレヲ  
揮テ敵ニ當ルヲ常トセリ其後白川初戦ノ日ニ  
敵丸ノ為ニ横腹ヲ打レ一旦引返シテ横濱ノ病  
院ニ入り手疾ノ療養ヲ尽セシガ快方ニ趣キタ  
ル後ハ再ビ會津ノ降ルヲ告ルニ及ンテ諸軍ト  
共ニ鹿兒島ニ歸リシガ西郷カ藩政ヲ改革セシ  
トキ永山ハ大隊長ニ任ズヘキ人物ナリシカド  
モ人員限アリテ河村野津大山ノ諸君ヲ始トシ

桐野篠原等ノ大隊長トナリシガ爲ニ何分其職  
ニ任ズル事ヲ得ズ其次ニ列セル教佐ノ職ヲ命  
セシト云フ辛未ノ歲御親兵ヲ召レタル節ハ一  
同市ヶ谷ノ陣營ニ出張シ其後陸軍少佐ヲ命セ  
ラレ大隊長トナレリ然ルニ永山ハ元來敢テ高  
位高官ヲ望マザル人物ニテ只管其職ヲ辭シテ  
一旦非役トナリシカドモ其後再ビ陸軍少佐兼  
開拓使大主典トナリテ北海道ニ赴キ屯田兵ノ  
長トナリテ頗ル職務ニ尽力セシカバ開拓長官  
モ甚々之ヲ愛シトソ已ニシテ本國ヨリ老母病



氣ノ旨ヲ申越セシヲ以テ帰省ヲ願ヒ鹿見島ニ  
到リテ老母ヲ看護セシカ病氣快方ニ赴キシ後  
ハ直チニ引返シテ出京セリ此時征韓ノ議起リ  
西郷桐野ヲ始トシテ薩ノ壯士輩ハ足ヲ挙テ帰  
國セシガ永山ハ頗ル征韓論ニ不服ナリシト云  
フ其ノ實證ヲ挙シニ弟ナル永山休清ガ征韓論  
ニ同意シテ帰縣セシトスルノ際兄ニ向テ拙者  
ハ今回ノ事件ニ依テ職ヲ辞シ是ヨリ帰國致シ  
ント申述スルニ永山ハ弟ニ向ヒ曰ク汝ハ近來  
頗ル人物ガ勝達セシト見ヘ是程ノ大事件ニ何

等ノ目的アリテ辭職シタルヤ併シ人々皆一己  
ノ見込アル者ナレハ已レガ糞囊次第ニ為スモ  
妨ゲナケレバ吾カ得テ知ル所ニ非ルナリト暗  
ニ休清ヲ非斥セシ由故ニ諸彦以一事ニテモ永  
山ノ征韓論ニ不服ナルヲ知ヘシ然ルニ前日  
老母病氣ノ節帰省セシ片一家ノ情實ニ於テ已  
ヲ得サル都合アリシカハ據ナク辭職セント欲  
セシガ其時同縣ノ友人中之ヲ止メタル者有リ  
シガ其實ニ餘義ナキ情實アルコトナレハ強テ  
之ヲ止メ兼遂ニ其意ニ任セシトソ帰縣ノ後ハ



獨立ノ地位ヲ占メ敢テ私学校ノ連中ト交ル事  
 ナクシテ今日ニ至リシガ此度ノ事変ヲ生スル  
 ニ及ビ桐野ハ淵邊逸見ノ兩人ヲ使トシテ永山  
 ノ家ニ遣ハシメ兵ヲ起スノ事情ヲ具サニ申述  
 シ其事件ニ同意ヤシ事ヲ切迫セリ此時ハ永山  
 淵邊逸見ノ兩人ニ向テ斯ル事件ヲ企ル事ハ甚  
 タ以テ無用ナリ鹿兒島ヨリ出テ政府ニ奉職ス  
 ル吾等ノ友人ハ學問ヲ追々上進シ昔日征韓論  
 ヲ以テ退キタルトキト同一ノ看ヲ為スベカラ  
 ズサレハ此輩ト争ハン事甚ダ難シ且ツ海陸ノ

軍備モ充分ニ整頓シテ何等ノ缺乏アルトナケ  
 レハ政府ト兵ヲ交ルトモ一箇ノ勝算ヲモ我ニ  
 有スベキ者ナシ若カズ非常ノ國難アル時ヲ待  
 テ我々ノ實効ヲ奏スルヲ以テ得タリトセン今  
 度ノ如キ勝算ナキノ暴挙ハ先ツ以テ見合ハサ  
 レヨト罵リタルニ淵邊逸見ハ詮方ナク帰テ其  
 趣ヲ桐野ニ語りシニ桐野ハ自ラ永山ヲ訪ヒ更  
 ニ懇談ヲ尽セシカハ永山ハ桐野トハ死生ヲモ  
 共ニセシ程ノ交際アレハ遂ニコレヲ辞スル  
 能ハス餘義ナク賊徒ニ在祖シテ一大隊ノ長ト

諸公手入...

...



ナリ兵士ヲ率ヒテ戰場ニ出テ空ク賊名ヲ負フ  
テ御船シ於テ割腹ヲ遂ルニ至レリ實ニ此人ノ  
豪傑ナルノ著シキハ拳テ救フルニ遐アラス  
故ニ粗來歴ヲ斯ニ載セタリ

諸公畧傳詩文選卷之下大尾

明治十年十月廿五日御届  
十一月 刻成

定價五拾錢

東京府下

第一大區四小區

旭町廿五番地管城舎

編輯人 渡邊助次郎

同

第一大區十二小區

馬喰町二丁目一番地

出版人 木村文三郎



